

文部省選定
日本映画ペンクラブ推薦

第34回日本紹介映画コンクール金賞受賞
平成2年度教育映画祭文部大臣賞受賞

伝統工芸の名匠

輪島塗に生きる

——重要無形文化財——



「輪島塗の技術」

— 柳橋 眞 —
(金沢美術工芸大学教授)

輪島塗を扱った映画は、過去にたびたびあった。朝市の光景とともに、季節の風物詩として取りあげることが多い。だが、今回の輪島塗の映画は、それらと趣きが違う。それは輪島塗技術保存会が今回、ポララ伝統文化振興財団の援助で作成した懸盤や椀・皿などの一式(計14点)の工程を詳細に撮影したものであるからだ。これらの作品は輪島塗の技術を後世に伝えるための技術記録として作成された。

日頃、輪島塗の作家や職人が願っていた、最高の作品を作るために、改めて桃山時代の懸盤の名品、「芦辺蒔絵懸盤」(高台寺伝来、重要文化財)を調査し、木曾檜の良材を求めるなどの努力をはらった。制作も厳格をきわめ、檜の樹脂ぬき、合板の焼炭作業、奈良晒を使った布着せなど、通常は見られぬ作業が多数加わった。

懸盤が塗れたら漆塗りとして最高だといわれてきただけに、塗師の刷毛さばきも入念だ。加飾も菊文様を沈金と蒔絵が互いに相手を引きかたてあって行き、一つに調和したものとなった。昭和61年から平成元年にかけて40年をかけた、この輪島塗技術記録は可能性の限界をきわめたものといえよう。もはや国内産檜の良材は手に入りにくいという、材料問題一つ考えただけでも、この高い水準で再び作成されることは難しいといえよう。

こうした貴重な試みを知った桜映画社では、その過程を詳細に撮影した。内弟子の年期上げの儀式など輪島塗の職人の生活まで、きめ細かく撮影され、映像は美しい。特に木地の処理や入念な漆塗りは、漆工専門家にとっても貴重な資料となるだろう。なによりも、この大事業に取りくむ技術者の気迫が、その顔や手の表情にあらわれ、神経をはりつめた作業となり、緊張感にみちた映画となっている。

一人の名匠の記録映画ではなく、蒔絵や沈金、漆塗りや呂色(漆面を研ぐ)、指物・曲物・挽物・朴物(朴材で脚などを作る)などと8職に及び技術者の分業を総合するだけに、構成に苦労されたが、その努力が映画に厚みを与えたといえ

よう。専門家ばかりでなく、本格的な仕事がつつ、ずしりとした重量感や気品を味わってもらうためにも、広く鑑賞されることを期待したい。



曲物師によって汁をいれる湯桶の製作



懸盤の命は、曲線部分の美しさで決まる



黒目漆を使う中塗は何度もくりかえす



呂色磨きは、表面を研ぎ炭でなめらかにし、生漆で磨きつやを出す



蒔絵の製作



内弟子の年期上げの儀式



輪島の冬は寒く厳しい



名物の朝市風景

■演出にあたって 大島善助（映画監督）

静寂。塗師の上塗部屋は静かだ。ひたすらに運ぶ刷毛のすべりが、耳をすますとくさかきこえる。輪島塗では漆を塗るとはいわない。漆を「しごく」という。それは漆と人間との壮烈な格闘技でもある。だから「おさえこむ」とも職人はいう。「漆は生きている」、その漆を生かすも殺すも、すべては自分の腕にかかっていることを輪島塗の職人は知りつくしている。

「輪島塗に生きる」は国の重要無形文化財に指定されている輪島塗の完全記録である。これまで輪島塗をとりあげた映像作品は多いが、この映画は椗木地、曲物、指物、朴木地、髹漆、蒔絵、沈金という全分野の、その道の第一人者が全員参加して一つの作品「ひのき ちんちん椗木地沈金きんまき え きくもん かけぼん蒔絵菊文懸盤一式」を完成していく5年間の過程をたどることで、前例のない作品となっている。そこにはまた、いくつかの試みがなされていて、これまた注目される。

例えば冷暖房対策である。千年の保存に耐える作品ということで、懸盤鏡板や湯桶のヒシヤクの柄などに工夫が凝らされている。しかし完成品だけみてもそれはわからない。漆の下にかくされてしまうからだ。映像は十分にそれを解明している。

また蒔絵と沈金が一つの作品として加飾されている。蒔絵師と沈金師の伝統的な個人技が同一作品に同一の格調をたたえてほどこされる。それは伝統の上に伝統を築いていこうとする輪島塗の新しい方向を示す試みとなっている。

それらの試みは実に新鮮である。輪島塗を知る人にも、また知らない人にも、楽しさと同時に多くの感銘をあたえてくれる。

しかも映像が美しい。輪島塗をはぐくんだ風土、能登半島、四季の輪島、朝市、降りしきる雪、詩情あふれる繊細にしてダイナミックなカメラが「懸盤」を見事にとらえている。

■輪島塗のできるまで

輪島塗は8～9人の職人達の分業によって作られます。完成までには20～25工程、手数を数えると124にもおよぶ丁寧な手作業が繰り返されます。

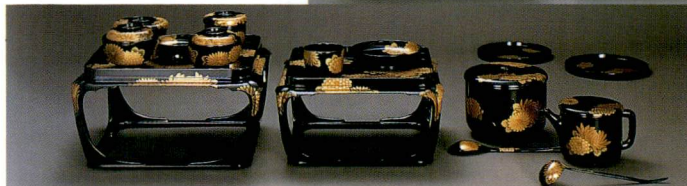


- 1 あらがひ荒型…原木をお椀の形になた・ちょうなではつり乾燥させる。縦木取り、横木取りがある。
- 2 あらがひ荒引き…目的に応じて、一回り大きめに削り、再び乾燥させる。
- 3 まじり木地…ろくろを使い、外から内、糸底と挽き上げます。薄いものは明りが透けるほどに薄く挽く。
- 4 ぬり布着せ…上縁や糸底等の壊れやすい部分へ漆で布をはり補強する。
- 5 まじり下地付け…漆と米糊、地の粉を混ぜたものをへらで塗る。一辺地、二辺地、三辺地とだんだん細かな地の粉を使い、3回～4回下地を塗り重ねる。
- 6 ぬり上塗…仕上げ塗り。最上質の漆を刷毛目やほこりを残さないように塗る。朱色の漆は朱色の顔料と漆を混ぜ合わせて作る。
- 7 かき加飾・蒔絵…筆に漆をつけて描き、その上に金粉・銀粉・色粉等を蒔き研いだり磨いたりして仕上げる。
- 8 かき加飾・沈金…ノミで彫って、漆を薄く塗り、金箔等をはり、漆が乾いたら余分の金箔をふきとる。



◀「檜様地懸盤一式」

「檜様地黒塗懸盤一式」▶



◀「檜様地沈金蒔絵菊文懸盤一式」

作品名：シリーズ「伝統工芸の名匠」

「輪島塗に生きる」

——重要無形文化財——

(16mm／カラー34分)

企画：財団法人ポーラ伝統文化振興財団

製作：株式会社櫻映画社

監修：柳橋 眞

製作スタッフ：製作・村山和雄
 脚本・構成・大島善助
 演出・撮影・村山和雄
 撮影助手・山屋恵司／木村光男
 照明・本橋俊男／浅見良二
 音楽・長沢勝俊
 解説・相川 浩
 録音・朝日スタジオ
 タイトル・線画・たくみ映画
 現像：ソニーPCL

協力：輪島市

輪島市漆器研究所

石川県立輪島漆芸技術研修所

輪島漆器商工業協同組合

島口 慶一

作品制作に参加された人たち

重要無形文化財輪島塗技術保存会員

● 椀木地

北 浜 保
 辻 義 男
 小 崎 清 人

● 呂色

大 橋 良 夫
 加 本 康 夫

● 蒔絵

張間麻佐緒
 坂本正春
 小森克巳
 田崎昭一郎

● 曲物

山下博之

● 指物

奥野秀次
 高柳修一

● 沈金

三谷吾一
 古今菁峰
 舟掛道雄
 板谷光治

● 朴木地

田中宗太郎

● 髹漆

塩多慶四郎
 宮腰 強
 後藤孝一
 徳野宗林
 中浜儀太郎

● 学識経験者

松本昌平
 五嶋耕太郎
 塩安誠治

● 重要無形文化財保持者

大場松魚 故松田権六

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

公益財団法人 **ポーラ伝統文化振興財団**

〒141-0022 東京都品川区東五反田 5-24-10 テラサキ第3ビル2階 TEL.03(5795)1279 FAX.03(3280)2830